世界の学校77

ソウルでの幸せな日々

ソウル日本人学校　小林　実季

日本から一番近いけれど，あまりにも近すぎて私はソウル日本人学校に派遣されるまで，韓国に来たことがありませんでした。派遣されてから約２年半ソウルに住み，近いけれど，遠い存在だった韓国が今はとても身近で大好きな国になりました。キムチチゲ，ビビンバ，サムギョプサル，チヂミ，サムゲタン，トッポギ・・・日本人にも馴染みのある韓国料理もたくさん堪能することができました。食文化も似ているため，少し辛いくらいで，日本人の舌にも合う料理ばかりです。また，市場に行けば旬の野菜や果物が並び，楽しく買い物ができます。

さらに，山に囲まれた長野県の小さな町で生まれ育った私には，大都会・ソウルでの生活もまた新鮮でした。英語や日本語を話せる人も多く，電車やバスなどの交通機関も発達しており，生活に困ることもほとんどありません。特にすごいのは携帯１つ持っていれば何でもできるということです。誰が来ても安心して過ごせる魅力的な町です。

そんなソウルに派遣が決まり，「いざ行かん！」と思った矢先，コロナ感染症が流行し，渡韓できるかどうかも分からない状態が続きました。日本からオンライン授業が始まり，幸い渡韓できたと思っても２週間の隔離，その後も分散登校や，急なオンライン授業への対応，カリキュラムの変更をしているうちに１年が終わってしまいました。何もできないけれども，新しくできることを模索しながらやっていくという手探りの１年でした。それでも日本人学校の先生たちは自分たちにできることを精一杯行い，オンライン授業と登校を繰り返し，今年度はようやく１年間オンライン授業なしに通常通り登校できました。当たり前が当たり前でなくなった３年間でしたが，皆で協力し，工夫しながら過ごす学校生活は私にとっては貴重で楽しいものでした。

さて，ソウル日本人学校は今年で50周年を迎えました。10月には50周年式典を開催し，今までの歴史を振り返り，また私たちもその歴史の一部だと感じることができました。幼稚部，小学部，中学部全員が集まって何かをするのも３年ぶりで，2020年に派遣された私たちにとっては初めての光景で感動しました。

コロナ禍の時期に日本人学校に派遣され，常に「自分にできることは何か」を問いながら過ごした３年間でした。コロナだけではなく，何が起こるかは分からないこの世の中ですが，どう過ごすかは本当に自分次第です。私自身はコロナ禍だったけれども，楽しいこともたくさんあり，幸せな時間を過ごせました。皆さんにとってはどんな３年間でしたでしょうか。日本人学校での「奇跡の出会い」に感謝しながらこれからも人とのつながりを大切にしていきたいと思います。

定番の焼肉サムギョプサル

韓国の食卓にはバンチャンというおかずがたくさん並びます。

50周年式典

書院などの世界遺産もたくさんあります。